

「穴」イメージをめぐって

“A hole”-image

石 金 直 美

1. 「穴」の多義性

「穴」という言葉から浮かぶイメージは、人によってさまざま。ある人は、砂場で作った山に、腕を砂だらけにしながら穴を掘り、トンネルの開通を目指した幼い頃の時間を思い出すかもしれない。『不思議の国のアリス』がウサギを追いかけて落ちた「穴」など、おとぎ話や童話の中に描かれた、ちょっと不思議な世界への入り口を連想することもある。またある人は、「穴を開ける」という言葉から、締め切りまでに原稿を完成できない恐怖を思い浮かべ、迫り来る時間の足音に身を震わせるかもしれない。また、こころにぽっかりと開いた「穴」を思い浮かべる人もいるだろう。その時「穴」からは、満たされない思い、寂しさや空虚感といった、うっすらと寒気を感じさせる風が吹き出してくる。

「穴」は不思議な存在である。いや、存在と言えるかどうかとも疑わしい。「欠如」によって始めて現出するのが「穴」であり、その実体をつかんだと思った瞬間には、何か別の名前がつけられ、「穴」はなくなってしまふ。少なくとも、「私のもの」にはなりえない。「穴」と何かが接する時、始めてその「欠如」が認識されて、「穴」という名が冠せられるのであるから。このつかみどころのなさが、人によってさまざまに異なるイメージを投げかけさせるのかもしれない。

大雑把に分類すれば、子どもの世界、ファンタジーの世界では、多くの場合「穴」は、何か未知の世界につながる可能性を感じさせる、わくわくさせるようなものであるし、仕事などの日常的感覚の世界では、「穴」は開けてはいけないものである。こころの中の「穴」と言えば、何か大事なものを失ってしまった埋めようのない喪失感を呼び覚ますことになるだろう。

人は「穴」に接近し、共に生きていくこともできるし、回避して生きることもできる。

「穴に落ちる」夢を例にとってみる。吸い込まれる、と思った瞬間、ハッとして目を覚ました経験は多くの人に共通するだろう。牧(2002)は、「落ちる夢」と「逃げる夢」を素材にして、そうした夢をどのように捉え、主体的に関わるかという視点と、自我の視点との関わりを論じている。「穴」の夢とイコールではないが、類縁関係にあるものとして、ここでは「落ちる夢」の捉え方に特に注目してみよう。「意味重視群」、すなわち自我にとって意味あるものとして夢に関わろうとする時、「落ちること＝回避したいこと」となる。それに対して、自我を絶対的なものとせず、相対的な視点をもつ「自我相対化群」では、自我のコントロールの埒外にあるものとして夢に自らをゆだね、落ちることを受容しようとする傾向が高いという。後者の態度で接するとき、落ちることは、自我にとって未知なる多義性をもったものとして、新たな可能性を開いてくれるかもしれない。

「穴」を、「私のもの」になりえない、「私」にとって意味不明のものとして捉えれば、回避的な姿勢が基本になるだろう。あるいは、「私」の支配を超えたものとして意味や目的を問うことをひとまず停止し、敬意を持って接する時、「穴」は何かを語りだしてくれるかもしれない。「穴」との関わり方においても、自我の姿勢、あり方が深く関わってくる、という予感を抱きつつ、「穴」イメージの周辺をめぐってみよう。

2. 「穴」に惹かれる

「穴」があれば、中をのぞきたくなるものだ。中には何があるのだろうか？ 穴の先にはどんな世界が広がっているのだろうか？ 日常の時間の中に、「穴」に目を向ける少しの余裕さえあれば、「穴」は素朴に人を惹きつける。

幼い子どもが最初に没頭する遊びの一つに、道端の排水溝に石などをぽつとんと落とす遊びがある。「穴」には、何かを問いかけたくなる魅力がある。

また、小学校中学年の子どもたちに、生活空間を地図にして描いてもらう調査を行った時の経験も思い起こされる。地図の中にマンホールを描き入れた子どもにその理由を尋ねて見たところ、「耳をあてると流れる音が聞こえるから、好きな場所なのだ」と語った。何か見知らぬ世界がその先にあることを予感させるということ自体が、子どもの好奇心や想像力をかきたてるのだろう。

プレイセラピーでの子どもたちとの出会いの中には、ある時期、砂場をひたすら掘ることに熱中した記憶が少なくない。「どこにつながるのか？」「地獄？」「何が出てくるの？」と真剣な面持ちで時間いっぱい掘り続ける。時間に限りのあるプレイセラピーの中では当然、底にまで到達することはなく、次回その子どもがやってくる時には、また一からの作業となる。それでも、また黙々と掘り続けるのだ。日常的感觉では、疑問が解けることのないまま、無意味な作業を毎回繰り返している、と感じるかもしれない。しかし、その子どもには、どこかにつながるかもしれない、つながらないかもしれない、けれど掘る作業に身を捧げること、そのものが大切なところの作業になっているのだと思われる。

意味や目的から全く自由であり、何か見知らぬ世界（それを異界と名づけてもよいかもしれない）への通路である可能性が匂うからこそ、子どもにとって「穴」は無条件に彼らを惹きつける存在なのであろう。

本田（1982）は、モーリス・センダックとルイス・クラウスの絵本

『あなたはほるもの おっこちるところ』の「穴」の場面を以下のように描写している。

「地面に浅く掘られた穴と、ねころんで心地よげに目を細くする男児。「あなたは はいって すわるところ」である。笑っているような、眠っているような、彼の全身から漂い出す快樂と陶醉の情感。」「穴」は「回帰すべき母胎であり、根源的なまどろみの場」であり、「この情景を眺めていると、私どももまた、気真面目な人生をひょいと脇へのけて、気ままにお休みをとってみたいくなる」と。

「穴」が喚起するイメージの一つに、母胎がある。梅原（2003）によれば、島根半島加賀港湾にある海蝕洞窟、加賀の潜戸というところは、二つの洞窟からなっているという。すなわち、死んだ子どもの霊を母胎へ返し再生を願う賽の河原になっている旧潜戸と、天孫降臨の際の道案内をしたとされるサルタヒコの誕生の地と伝えられる新潜戸である。我々が「穴」に身を沈めるとき、ぼやけた視界、音のくぐもりなど共感的にすっぽり包まれる感覚が呼び覚まされ、日常の時間感覚は停止する。そうした性質がおそらく、生命の根源である母胎の、言語以前の幽かな記憶を刺激するのだろう。

しかし、母胎は永遠に留まっていられるところではない。樂園はいつか去らなければならない。樂園を後にする行程には、危険と苦痛がつきまとう。「穴」は「この世」の出発点であるだけでなく、「あの世」とも交差するのである。ちょっと立ち寄るから「穴」は我々を魅了するが、その時間にはいつか終止符を打たねばならない。母胎には、あの安心感に回帰したいという願望を誘い込む面と、引き込まれ呑み込まれる力に抗って「穴」を突き抜けていかねばならない、少しの恐怖感と寂寥感を感じさせる面とがある。

「穴」は非日常的な時間、空間を感じさせるからこそ我々を惹きつけるが、永遠に続く一方通行になるとしたら、その恐ろしさは計り知れないものとなる。先に挙げたプレイセラピーの中で「穴」を掘り続ける子どもも、底に到達することはないが、その時間には終わりがあり、日常に戻る時間が約束されているからこそ、一心不乱に没頭することができるのかも

しれない。「穴」にしっかりと身を沈めるのには、日常世界に戻ってくるための時間、空間の区切り、すなわち守りが必要なのだ。そのための装置の一つが、「祝祭の空間」なのではないか。

3. 「穴」を開ける

前節では、「穴」に惹かれるという視点から「穴」イメージを探ってみた。外部にある「穴」に自らを委ねるということは、象徴的に、我が身にも「穴」を開け、両者の間に、流れ、交通を起こすことを意味する。本節では我が身に「穴」を開ける、という視点から「穴」イメージを探っていく。

梅原（2003）は、『カミの現象学—身体から見た日本文化論』において、日本各地の祭りや宗教的な儀礼を具体例に挙げながら、「自分と自分以外のものとの間の回路」としての「穴」をキーワードに、日本文化を論じている。「穴が開くとき、自分ではないなにかが侵入する。穴が開くとき、自分ではないなにかへと自分が放たれていく」と述べる。

例えば、「穴」の開き方の一つとして、「食べる」という行為を取り上げている。宮古島西原の「六月ニガイ」という行事の中では、一頭の豚を包丁で各部位に切り分け、内臓やある部位は神に供えられ、残りは鍋で煮て、後で皆で食べるという。

ここで我々は「食べる」行為の根本的な性質を突きつけられる。食品トレーにきれいに並んだ魚や肉の切り身、土を落とされ同じ大きさや形をして並んだ野菜たち、容器に入ったさまざまなサプリメントなどに囲まれている我々が忘れていた現実がここにある。食べることは、「他者」の命をいただく行為である。「他者」の命の上に我々の命がある。このこと一つをとっても、我々は「他者」との抜き差しならない関わりなしには生きられないと言える。食べることの現実が祝祭空間の中で突きつけられることにより、我々自身が「食べる—食べられる」生き物連鎖の世界の一部であることを再認識させられる。私は他の生き物の命をいただく、そして、私の命も他の生き物に捧げられる運命を負っているのである。

また、豚の断末魔の叫びを聞きながら切り分けていく行為は、「食べる」ことの暴力性をも曝け出す。「他者」の命を「私」のために否応なしに奪うのが「食べる」行為である。だからこそ、我々は「他者」の命の尊厳に敬意を払いながら、「ありがたい」と手を合わせて、頂戴するのである。

現代の食生活は、コーティングを施すことによって、巧妙に「食べる」ことの残虐さを隠蔽していると言える。我々は、普段の食事の際にこうした食の側面をあまり意識することはない。「いただきます」「ごちそうさま」と手を合わせる行為の中に形式的に保存されているのみである。だからこそ、日々の生活は脅かされることもなく、淡々と繰り返されていくのである。しかし、時には、我々の目を開かせる祝祭の時間・空間が必要になるのである。

「六月ニガイ」に限らず、民衆の中で継承し続けられた祭りや宗教的儀式には、「食」や「性」、「暴力的なまでの力の誇示」といったテーマが象徴的な形で表現されているものが多い。いずれも、「私」単独では成立しない生の一面である。ゆえに、自分では思い通りにならない、常に「他者」に晒されているのが我々の生であることを、圧倒的な強度で我々に突きつけてくるテーマである。非日常的な限られた時間・空間の中で、また、何代にも渡って脈々と語り継がれ、繰り返されてきた形式という安全装置の中で行われるから、そうした生の根源に触れることが可能になるであろう。梅原は、そうした非日常的な時空が我々の身体に開かれることを「穴を開ける」と表現している。彼は「人は穴を築くことによって、宗教的あるいは精神的な存在であることができる」「穴は、「神と人とのコミュニケーションの形式」の別名である」と述べる。

自らの生の中に他の生が含まれており、かつ自らも他に捧げられる運命を負っていることを認識すること、それが、自分の力で支配することのできない「穴」を内に抱えた存在として自らを捉えることにつながる可言えようか。その「穴」を「神」との通路と呼ぶ人もいるだろうし、精神分析の創始者であるフロイトの用語を使うなら、それこそ「エス」の深淵であると言えるかもしれない。

前節で論じたように、子どもは外部の「穴」と戯れることによって、東

の間の異界との交流を味わう。「七歳までは神のうち」とも言われるように、そもそも子ども自身が、自分自身ではどうにもならない世界があきながら成長を遂げる、「穴」に近い存在である。それゆえに、「穴」に接近しやすいし、日常の時間に戻ってくることも比較的容易であると思われる。しかし、日常的世界の中にどっぷり浸かって生活している大人にとっては、自我の統制を超える「穴」はなるべく開けてはいけないものである。安易な接近はむしろ日常生活を脅かす可能性を秘めている。そのため、集合的な安全装置として、祭りや儀礼という形で「穴を開ける」祝祭時間・空間が受け継がれてきたのではないだろうか。

4. 「穴」を拒む—「穴」を求める

梅原（2003）は、莊子の「応帝王篇」のこんな寓話を紹介している。

「南の島の支配者と北の海の支配者が、「混沌」という名の中央の支配者のところで、大いなるもてなしを受けた。二人の支配者は、その恩に報いようと相談し、「混沌」にあるプレゼントを思いついた。それは、顔の七つの穴（目耳口鼻）を一日に一つずつ贈ることだった。「混沌」にも感覚や知覚の快樂や利便を供しようとしたのである。しかし、「混沌」は七日にして死んでしまった。」

穴が開けられることによってなぜ「混沌」に死がもたらされたのだろうか。「混沌」とは、あらゆるものが分節化されないまま含まれている自己完結的世界である。すなわち「他者」との交通を基本的に必要としない。逆に言えば、それがいないために安定し続けられる世界である。そこに穴が開けられ、「他者」を認識し始めることによって、自己完結的世界に「穴」が開く。自己の欠如、限界が認識され、すべて満たされた「混沌」の楽園には留まれなくなる。

現代社会が基礎としている科学技術的思考は、目的を設定して、必要な手段を編み出し、求める結果を得ようとすることによって成り立つ。明確で、普遍的な「目的—手段—結果」という因果関係のネットワークを張り巡らすことによって、「穴」は可能な限り排除される（とは言え、独創的

な発見が偶然の失敗から生まれたという話もよく耳にする)。目的に沿わないことや目的をもたないこと、偶発的な出来事などは無意味なものとして回避し、なるべく早く欲望を満たすことが我々の生活を豊かにすると信じられていた。

そうした世界はむしろ、「穴」がもたらされることで「死」を迎えてしまう自己完結の世界、自己充足の世界である「混沌」に近い。満たされているという幻想を維持し続けるためには、「穴」は不要である。

前節において、古来の祭りや宗教的儀式が、我々は自らの内に「穴」を抱えた存在であるということ認識するための装置の役割を果たしていたのではないかと論じた。しかし、現代社会の中では、祭りの多くはプログラム進行表とテレビやカメラの枠内に収められることで、生きた命を、日常的時間の一部に封じ込められてしまったように思われる。

我々はむしろ「穴」を拒んで生きている。

例えば、前節でとりあげた「食べる」という行為に再び光を当ててみよう。「食べる」ことの残虐さが巧妙に隠蔽されていることは既に指摘した。我々は、欲しいと思ったその時に我々の欲望を満たしてくれるコンビニエンスストアなしの生活は考えられなくなっている。また、健康な身体を維持するためには、カロリーや含有栄養量といった数値で表された食品を、過不足なく、計画的に摂取することに注意を払うべきだとされる。そこには、「他者の命」をいただく、という視点はない。自らの必要性のために「食べる」行為がある。自らの欲望や計画に従って完結する行為、そこに「穴」はあってはならない。

心理臨床の現場で出会う摂食障害に苦しむ人たちの多くは、ダイエット目的に食事の制限を始めるうちに、次第にコントロールすること自体が目的となっていくってしまう。それが破綻して、過食に転じる例が少なくない。「これが食べたい」という欲望が感じられないまま、手当たり次第に身体の中に食べ物を詰め込んでいく。「満たされた」という充足感は全くなく、今度は、コントロールを失った自己嫌悪と、太ることへの恐怖に苛まれ、何とか過食行為をなかったことにしようと躍起になる。理想とする身体を手に入れるために計画的に食事をコントロールし始めたつもりが、

暴走する食の欲望に振り回されるようになってしまう。

「穴」をなくす幻想にしがみつくと、かえって歪んだ「穴」が開き、今度はその「穴」に翻弄される、と言えるのではないか。

斎藤（2001）は、社会学者・大澤真幸の論に翻案を加え、次のようなキーワードで現代社会を論じている。大澤は70年代初頭までを「欠如の時代」、70年代後半から80年代を「欠如の不在の時代」、90年代を「欠如の不在」を欠如として捉える時代とする。斎藤はそれを踏まえて、現代を「欠如そのものを欲望する時代」、欠如のリアルな感覚を欲する時代である、と言う。「欠如の不在」を欠如として捉えることがもたらす空虚さの感覚を免れるために、欠如そのものを求める。その求め方の一つが、「自らの起源としてのトラウマ探し」であり、その対極にあるのが「純粹な強度そのものであろうと欲すること」や「無目的な暴力」ではないか、と論じている。

「欠如」は我々を欲望に駆り立ててくれる。「欠如」を穴埋めする幻想を追い求めることで、「私」は一つの方向性に向かって集約される。大澤が「欠如の時代」と命名した時代には、その幻想はおそらく社会的に共有されたものであり、「私」も同じ目的に向かう社会の一員であるという明確な帰属意識をももたらしてくれたことだろう。そして、「欠如」がない世界という幻想が現実のものとなり始めると、共有された達成感、高揚感が社会を狂騒に駆り立てる原動力となっていく。

しかし、その狂騒が覚めた後、ふと「私」個人に立ち返ってみると、「私」は「何を求めたらいいのか」「どこに向かえばいいのか」見失ってしまっていた。それが「欠如の不在」を欠如として捉える時代の到来である。個性の尊重、それぞれの自己実現、と言えば聞こえはいいが、誰かに与えてもらうのではなく、自分自身で切り開いていく道りは果てがなく、厳しい。多くの人が「本当の自分」探しという動機に駆り立てられる。大人になる過程でどこかに置き忘れてしまった「本当の自分」、これまで光を当ててこなかったために眠っている未知の可能性を秘めた「本当の自分」、といった失われた物語を回復したいと求める。かつて居た楽園を追い求めるように。もしくは、楽園を追われねばならなかった理由を

「トラウマ」という物語に求めるように。

斎藤の言葉を使えば「欠如そのものを欲望する時代」である。本論の流れに沿って言えば、社会が「穴」を拒んできた先に見えてきたのは、失われた「穴」そのものを求めて右往左往する個人だったのだ。

斎藤が「欠如そのものを欲望する」現代において「自らの起源としてのトラウマ探し」の対極においたのが、「純粋な強度そのものであろうと欲すること」や「無目的な暴力」である。既に前節において、「穴を開ける」装置である祭りや儀礼が、「食」や「性」、「暴力的なまでの力の誇示」といったテーマが象徴的に表現されているものが多いことを指摘した。意味や目的を求めず、「私」を超えた圧倒的な強度に自らを委ねることで「穴を開ける」。しかし、祭りや儀礼のような、日常的な時間との境界が明確化された安全装置が機能していない時、我々を強力に惹きつける「穴」は破壊的なまでの圧倒的な力で我々を捉えて放さなくなってしまう。

「穴」と「暴力」のつながりを示唆するものとして、村上春樹氏の小説『ねじまき鳥クロニクル』（1994）を連想するのはたやすい。小説の主人公は古井戸の底に閉じこもる。そこで「僕という人間は結局のところ、どこかよそで作られたものなのではないのだ。そしてすべてはよそから来て、またよそに去っていくのだ。僕はほくという人間のただの通り道にすぎないのだ」と考える。街で出会った見知らぬ男と殴り合いをした金属製のバットを持って井戸に降りていく主人公。ノモンハン事件の記憶をとどめる防空壕と、主人公が閉じこもる井戸の底が、「理不尽な暴力」によって錯綜してつながっていく。高澤（2001）は、ここに「自閉と暴力」というテーマを見てとっている。

本論で村上のこの作品に深く分け入ることは避けるが、主人公と「穴」、「暴力」が深くつながっていることを指摘してもそう間違いはないであろう。ある日突然妻がいなくなることで日常的世界・時間を開いた「穴」、主人公が閉じこもる「穴」、「通り道にすぎない」人間である「穴」を抱えた僕、暴力によってつながる「穴」。

「自閉」的な世界は、本節の冒頭で取り上げた荘子「応帝王篇」の寓話にある「混沌」を思い起こさせる。「混沌」は「穴が開く」ことによっ

で、欠如を抱えた「自分」に気づかされる。『ねじまき鳥クロニクル』の主人公は、「暴力」によって世界との通路を回復しようとしているように思われる。「他者」を傷つける時の「私」の痛み、傷つけられる「私」の痛みは身体にリアルに刻印される。「他者」との間で、高圧電流が走るような強烈な強度を持った交通がその瞬間に開かれる。そこには意味や目的は不要な、直接的な世界との交流がある。

自らの起源、見失ってしまった「本当の自分」探しが、自らの内側に「穴」を求めて世界とのつながりの回復を求める内向した試みであるとするならば、「無目的な暴力」は力の強度によって「他者」とつながる回路を求める外向した試みであると言えるのではなからうか。

5. 私という「穴」

「穴」を拒んだ現代に生きる我々がたどり着いた、「穴」の不在を欠如として捉えることがもたらす空虚さの感覚を免れるために、「穴」そのものを求める現代。そうして自らの内側に「穴」を抱えることになった「私」はどこに向かうのか。

本節では赤坂真理の小説『蝶の皮膚の下』(1997)を取り上げる。赤坂は、1964年生まれ若手純文学作家である。小説のストーリーは本論では直接取り上げないが、大雑把に要約すれば、「様々な薬物を使いながらホテルで働く主人公・梨花と、元ボクサーで脳に障害を負い、言語や行動の脈絡がなくなってしまった航が、それぞれに世界とのつながりの回復を求めていく物語」と言える。ここでは、梨花がどのような航跡をたどって「私」を回復していくか、「穴」との関連で論じていきたい。

ホテルのフロントで働く梨花は、客が最も求めている役を完璧なまでに演じる。鏡に向かって笑顔を作り、「私の自我がホテルと同化し世界の果てまで続く大きな波に溶け込みほどなく、鏡の面のように凧いだ」。その場に応じて求められる仮面をつけることで我々は社会に適応している。その仮面をユングは「ペルソナ」と呼んだ。ペルソナをつけることで社会の中で「私」の存在価値・居場所が保証される。しかし、それが肥大して硬

直してしまうと、ペルソナを維持することに多大なところのエネルギーが費やされるようになってしまう。本来「私」を守るはずのペルソナが、「私」と不可分になってしまう。

梨花は完璧なペルソナを身につけていた。それを維持するために、梨花は「なりたい自分」を作り出す。その時の自分の状態を思うままに操るため、アルコールや薬を常用している。「自分の状態なんて創るものだ、何もせずに待ってる奴もみんなアホ、だから私は創るのだ」「それはよりよく生きるため。誰に迷惑もかけないしそれで私がよりよく仕事ができればそれが世間のためでもあるではないか。むしろ世間のためなんて低次に目標は置かないすべては私が私の主人になるため、私がいつでも私の創造主であるため」「とにかく、上手く言えないけど自分でコントロールができないことって耐えられないんです」と梨花は語る。

自分を思い通りに操ることができる、「自我」が自分を全て統括することができる、それこそが自分が自分の主人であることである、と梨花は考えている。本論の言葉を使えば、「穴」を拒み、自我のコントロール下で、破綻のない自己完結的世界を完成させる自己のあり方である。

エリクソンのアイデンティティという概念は、日常の言葉で言い表せば「これが私だ、という意識」ということになる。青年期の発達課題はアイデンティティの確立であるというのは、既に一般に広く受けいられている知識であると言っても過言ではない。そこでイメージされているのは、アイデンティティが核となって隅々まで支配を及ぼす、隙のない自我のあり方なのではないか。大人になることとは、自分を思い通りにコントロールできるようになることである、と一般に考えられている。それを極端な形で、より完璧に推し進めたのが梨花の「創造主である私」である。

梨花は脳障害を負った航との関係で、「性」や「暴力」といったテーマに直面する。航に殴られることによって顔に傷を負う梨花。「その上からさらに殴られると、私がどんどん光の全く射さない黒い穴の中にめり込んでいつつには私は私という穴そのものになる。自分は自分のかたちのひとつの穴、記憶を持たないってこういうこと？」

そして、ホテルのフロントとしての職を失ってしまう。まさにペルソナ

をなくしてしまうのだ。「お前はお前という穴である。」「そのとき声がした。そうか、そうだったのか、私は穴か。私はすごく納得してしまう。私には何もないから、誰か私に入れてよ何か入れてよあなたを入れてよ。」

本論では既に、「暴力」がその圧倒的な強度とリアルな身体感覚によって「他者」との回路を開く、すなわち「穴を開ける」ことを論じてきた。梨花が「創造主」として作り上げてきた「私」という仮面は、隙がないように見えながら、空虚さを覆い隠す硬い殻に過ぎない。「穴を開ける」ことには耐えられない。少しのひびが致命傷となって、虚構の覆いを破壊する。

しかし、この「穴」は梨花が自ら求めたものである。航を救いたいと思う梨花は、自分自身「生まれた意味を、教えてくださいとずっと小さな時から私は祈っていたように思う」という。航との出会いによって「求め祈った私に救いは与えられた」と思う。作り上げてきた「客の欲するものを与える私」という自己完結的な仮面は、「私」のこころの中の空虚さを覆い隠すだけ。「他者」は「私」の外皮をなでて通り過ぎていくだけ。「私」は何にも満たされない。梨花自身、無意識のうちに、そうしたフェイクの世界に「穴を開け」、「生」のなまの本質に触れることを求めていたのではないか。

そこで「お前はお前という穴である」と気づかされる。斎藤の論に従えば、「空虚さ」に気づかされた、ということになるだろうか。しかし本論では「穴」を単純に「欠如」を言い表すものとは捉えていない。「穴」は通路ともなる。「自我」の一元支配による狭い「自分」を突き破り、「他者」や世界と交通する通路となる可能性を開くのが「穴」である。ただしそこでは、意味を求めたり、手段を講じたりする「自我」の働きは役に立たない。我々にできることは「自分」を投げ込むことだけである。

梨花はある日言葉を失ってしまう。直接の引き金となったのは、梨花と協力して航の脳障害の治療を行っていた医師・吉岡が、梨花を飛び越して航の症状に強く惹きつけられ、梨花を怒鳴ったことである。「お願い私を見捨てないで。私を捨てないで。どうしてみんな、私を無視しようとするの?」。「穴」を排除することで完璧に壁を張り巡らした「私」にとって「他者」は横をかすめて通り過ぎるだけである。『蝶の皮膚の下』河出文庫

版で解説を寄せている石川忠司は「ここではまさに「愛」がすべてである」「愛される／保護される」のは無常の快感、というより生きる意味であり、その反面「愛されない／保護されない」のは決定的な死の宣告だ」と書く。「他者」を必要としないことで安定を維持する「私」の世界は、誰かに認められ、保障されることがない。自立と言うよりむしろ、自分自身で寄って立つところを作り続けなければならない、孤立した世界である。その世界の維持のために梨花はアルコールや薬を用いなければならなかった。「依存症になんてなる奴はバカ」と梨花は言うが、アルコールや薬によって「穴」を埋めて、自分で充足していると思っている強がり、痛々しく哀しく響く。

「言葉」は本来、人と人の関係を円滑に営むための道具である。例えば「私」が「あなた」に好意を持っていることをノンヴァーバルな手段によって伝えることは難しくない。しかし「私はあなたを愛さない」「私はあなたの脅威ではありません」といった「不在をダイレクトに示せる表現手段は、この世に、言葉しかない」と言葉を失った梨花は悟る。つながろうとする人と人は必ずしも言葉に頼る必要はない。逆に、「性」や「暴力」のような直接的なコミュニケーション以外の、人と人が一定の距離を置いて互いの安全を保障しあうための手段は「言葉」しかない。「穴が開く」ことの破壊性を緩衝材のように吸収するためにシステム化されたのが「言葉」である、と言ってもよいかもしれない。「私は穴」であることを自覚してしまった梨花は、自分を守るために「他者」との交通を調節する手段をなくしてしまったのだ。

少し脇道にそれるが、赤坂は別の作品の中でも「言葉を失う」主人公を描いている。『ヴァイブレイタ』（1999）の主人公は、中二の頃教師に訳もわからないまま殴られたことを契機に「言葉が崩れた」。「何も変わって見えない制服の下は、穴のような場所で、穴はあたしそのものだ。人の言葉を穴の中に引き込んで切り貼りする。人が言ったことであれば、人に通じると思ったから、聞いたのだ。そして人の言うとおりに、言おうとした」。高澤（2001）は、彼女にとって言葉が壊れるとは「暴力を極端に内面化したときに引き起こされる言葉の崩れである」と理解している。

主人公に加えられた教師の暴力は、彼女の世界に「穴」を開けた。この国語教師が、授業の大半を、生徒にサ行変格活用やラ行変格活用の活用語尾を言わせていくことに費やしていたことは偶然ではない。彼の暴力は「言葉」の持つ虚構性を暴き出し、破壊してしまったのだろう。「言葉」は人と人の通路を開くのではなく、安全な境界を作ることに役に立つ。境界を侵犯して「私」の世界に理不尽に踏み込んできた「他者性」の前では、「言葉」は無力である。「言葉」によって楽園を修復することはできない。「私」の「言葉」、「私」を伝える「言葉」を見つけ、「穴」を単なる欠如ではなく「他者」と繋がる回路に開かなければならない。

『蝶の皮膚の下』に話を戻そう。言葉を失った梨花はプールに通うようになる。「水に浸っているときだけ私は自我の境界を確認できて、生きていると思えた。逆かもしれない。水の中に在るときだけ、自我が消える」と。先に、「穴」は「他者」や世界と交通する通路となる可能性を開くが、我々にできることは「自分」を投げ込むことだけである、と論じた。ペルソナと一体化して硬直した自我の硬い殻を破壊した梨花は、無防備のまま世界に晒されている。「私」を包み守ってくれるのは皮膚感覚だけだ。水に浸かることを羊水への回帰と捉えることもできるだろうし、水と接する皮膚を感じることで「私」という存在を感じるができる、すなわち存在する「穴」を実感することができる、と理解してもいい。「穴」は「穴」そのものでは存在しない、何かと接することで初めて「穴」となるように、「私」も外界と接し、その接面を感じることで初めて、おぼろげながら輪郭を捉えることができるものなのだ。乳児が「私」を認識する起源は、見られ、触れられることにあることを思い出してみるとよい。

ペットショップの店主に襲われそうになった梨花は、スタンドで彼を殴りつけることで辛うじて身を守る。「自分の感覚が希薄になって、体を他人に乗っ取られる恐怖を味わう。」「冷たい手で頬をぴしゃぴしゃと叩いてみる。自分がわからない。」「私は、境だけが、私だ。」「自分を傷つきたい衝動に駆られ、我慢した」。

「自我」の殻を破った「穴」である「私」は、こんなにも侵入されやすく傷つきやすい。心理臨床の現場で出会うリストカット症候群の少女た

ち、身体のあるところにピアスの穴を開ける少女たちが、皮膚に傷をつける瞬間にだけ「自分」という実感を味わうことができる、と語ることを思い出す。祭りや儀式のような安全装置のないままに、個人のこころの過程として「穴が開く」ことが、いかに危険と隣り合わせの危うい道程であるか、思い知らされる。だから時として、心理臨床家の、同行人としての守りが必要となる。

「自分」を何とか取り戻そうとする梨花は、プールの水の底に沈む。そして「私はいきなり、哺乳類の自覚にめざめた。」「滑らかで無防備な皮膚に包まれた熱い体液。それが自分だった。水の底でじっとしてお温かい自分、それが哺乳類の誇りだった。自分の中の莫大な時間を思った。私が薬やアルコールを使った最初の理由は時間の流れを好きに変えるためだった。けれど私を変えられた時間は、ほんの、ほんの、わずかに過ぎない。自分が動きをまねられる生物に、まねられない生物に、ひとしく畏敬の念を抱いた。』

梨花が「穴」の先に回路を結んだのは、身体の中に眠る、生物の進化をはるか遡った、哺乳類の「私」だった。「私」は生物の進化の中の一つのちっぽけな点にすぎないし、かつ「私」の中にすべての時間の流れも含まれている。「私」はそうした流れの中で他の命とつながっている。「私」が思い通りにできる、支配者となれる「自我」は、その大きな流れの中で流される浮島一つにも満たない。

「私」というアイデンティティが核となって、「自分」の統治者になる、という「自分」イメージと、梨花が身体ごと感じた「自分」イメージは全く趣を異にする。我々は、「言葉」や「トラウマの物語」、「愛」などで「穴」を埋めることでは癒されないところまできているのかもしれない。自らの内にある「穴」に沈み込み、どこかにつながる回路を見つける作業こそが、心理臨床の志すところであると言えようか。

6. 最後に、「穴」イメージをめぐって

本論では、「穴」という曖昧で多義的なイメージの周辺をめぐり歩くこ

とで、「私」と「穴」の関わり方の様々な様相を探ってきた。(1)「私」の外にある「穴」に没頭することで「穴」の先の未知なる世界と戯れる関わり方。意味や目的を問う「自我」の働きをひとまず止揚して、自分を投げ出せるかどうか、が肝心である。(2)祭りや儀式といった、集合的な祝祭時間・空間の中で「穴を開ける」関わり方。限られた非日常的時間・空間、形式といった安全装置が働いているからこそ、そこで生の本質に目を開くことができる。(3)「穴」を排除することで、かえって歪んだ「穴」を求める関わり方。「穴」をなくすことで満たされるはずが、何を求めたらいいのか見失ってしまう。外側に向かって強度を求めることでリアリティを求める方向と、内側に向かって「失われた物語」を探す方向が見られる。(4)「私」というものの自体が「穴」であると認識し、「穴」を回路として開く関わり方。

いずれにしても「穴」と関わる時、「自我」は「私」の絶対的な支配者ではいられなくなる。それこそが多義的な「穴」イメージの最も重要なポイントなのかもしれない。

引用文献

- 赤坂真理 (1997)：蝶の皮膚の下。河出書房新社
赤坂真理 (1999)：ヴァイブレータ。講談社
本田和子 (1982)：異文化としての子ども。紀伊國屋書店
石川忠治 (1999)：解説 心の壁 愛の橋。河出文庫『蝶の皮膚の下』, 176-184
牧剛史 (2002)：夢に対する主体的関わり方についての研究。心理臨床学研究, 20(3), 265-274
村上春樹 (1994)：ねじまき鳥クロニクル。新潮社
斎藤環 (2001)：「空虚さ」を超え「不安」のほうへ。大航海, 37, 94-102
高澤秀次 (2001)：暴力文学論—インターネット時代の小説の血糊。大航海, 37, 161-169
梅原賢一郎 (2003)：カミの現象学—身体から見た日本文化論。角川書店